当代中国書評家の三賢人
止庵，謝其章，楊小洲について（上）

蔭　山　達　弥

〈Summary〉

Zhi An, Xie Qizhang and Yang Xiaozhou are famous as a great reader of today's China. They have all sorts of friends, especially, this three persons are close friends. Zhi An is getting on some works（a book-review, writing and editing）by myself, and Xie Zhizhang, Yang Xiaozhou is, too.

All of them are members of a book-review in China Reading Weekly.

China Reading Weekly was first issued in 1994.

We can learn a lot from them. In the beginning, we will examine their daily works.

1. 週刊紙『中華読書報』書評委員

2009 年 11 月，中国湖南省長沙市にある岳麓書社から‘书话随笔文从系列’（書物随筆叢書シリーズ）として，止庵《沽酌集》（初版 6,000），謝其章《搜书后记》（初版 6,000），楊小洲《夜雨书窗》（初版 5,000）の三冊が刊行された。

時を同じくして，（筆者の知る限り 2008 年から）2011 年まで，止庵，謝其章，楊小洲の三氏は，中国で発行されている週刊紙『中華読書報』の‘本报书评人’（同紙書評委員）として，名を連ね，その間，書評を中心に同紙に別表の通り多数寄稿している。

『中華読書報』は 1994 年 7 月 6 日に正式に出版創刊された。創刊 20 周年に当たる 2014 年の 2 月 26 日号には初代編集長であった梁剛建が《中华读书报创刊那些事》（中華読書報創刊時のいくつかの事）と題して，創刊までにいたる経緯を書いている。それを読むと，梁が所属していた『光明日報』は刊行を支持してくれたものの，何ら資金を援助してくれなかったので，家から 2 万元持ち出し，使い終わると同じ『光明日報』傘下の『書摘』雑誌から 2 万元借り，その金を使い切らないうちに，遼寧教育出版社が広告費 15 万元を入金してくれたと，当初は資金繰りにも苦労したことが分かる。

『中華読書報』はどのような新聞を目指しているのか，どのような読者を対象とするのか。梁剛建は言う。それは 20 年間の同紙の中に具体的に表れていると。「思想があり，認識などの深さがあっても，お上の訴状にはしない。ふつうの教養人が楽しんで見る文字で，多種多様な観点と考えを紹介する。ニュースがあり，ルポもある。しかし，人騒がせなニュースは拒否し，ゴシップにも断固反対だ。ありのままの客観的な言葉使いで，その時の本と出版者，読者を記述す

る。」このような編集方針に沿って，止庵，謝其章，楊小洲の三氏が同紙の書評委員のメンバーに選ばれたのは，正鵠を射た人選と言わねばならない。

拙稿では，当代中国きっての愛書家，止庵，謝其章，楊小洲の三氏がこれまで歩んできた足跡を紹介したい。三氏ともそれぞれ趣向は異なるが，ただ本を購入し，読むだけでは飽き足らず，書評を寄稿し，著書を次々と刊行している。とりわけ止庵は，長年に渡って，魯迅の弟，周作人の著作を遺族に依頼し，自筆の原稿と照らし合わせ，誤りを正した上で，より良いテキストを次々と読者に提供している。さらには氏が愛する張愛玲や廃名の作品集も同様な作業を経て，出版しており，もはや単なる愛書家の域を超えている。謝其章も自身が長年苦労して集めた民国期の映画雑誌『電影雑誌』のリプリント版を，楊小洲に編集を依頼し刊行している。

2. 止庵，謝其章，楊小洲『中華読書報』執筆掲載一覧（2008 年～2011 年）

以下に掲げるのは，止庵，謝其章，楊小洲の三氏が『中華読書報』に，2008 年から 2011 年の間に発表した文章の一覧である。掲載日，タイトル（原文のまま，日本語訳可能なものは，できるだけ訳を付した），解題備考の順になっている。

作成した一覧を見ると，止庵が編集，校訂した文集や自身の著作を，謝其章，楊小洲が書評し，謝其章の著作を楊小洲が書評していることに気づく。

止庵

2008 年 1 月 16 日	出版繁盛日　阅读萧条时	《北京图书订货会》（北京図書発注会，ブックフェア）で目に留めた書物を紹介
1 月 23 日	读书，写书与编书（本を読むこと，本を書くことと本を編集すること）	自身の自由な読書から始まって，個人が偏愛する書物を整理出版，この種の書物を愛する読者に比較的良い版本を提供する作者止庵に特別に依頼した原稿
3 月 12 日	无轨列车的一瞥	揚之水ほか《无轨列车》上海書店 2008 年 1 月出版
3 月 19 日	也谈《废名讲诗》的选编	陳建軍，馮思純編集校訂《废名讲诗》の書評
6 月 18 日	我收藏的签名本（私が蒐集した署名本）	
7 月 16 日	鲁迅与美术（魯迅と美術）	孙郁《鲁迅藏画录》の書評
10 月　8 日	鲁译刍议（魯迅翻訳卑見）	《鲁迅译文全集》北京魯迅博物館編，福建教育出版社 2008. 4. の書評

10 月 22 日	“没有好久”之类	陈子善《爱黄裳》上海書店出版社 2008. 6. の書評
10 月 29 日	“听”与“谈”之外（『楊絳が昔のことを語るのを聞く』以外の昔のこと）	吴学昭《听杨绛谈往事》三联书店 2008.10. の書評
11 月 26 日	关于牺牲（犠牲に関して）	11 月 13 日『南方周末』紙に張輝傑《鲁迅与许广平的事实重婚》（魯迅と許広平の二重結婚）が載り，魯迅と弟周作人との不仲が論争になっている。
12 月　3 日	人性的因素及其后果	グレアム・グリーン（Graham Greene，英）の《人性的因素》（The Human Factor. 1978.）の書評。2008 年 10 月 1 日に中国訳林出版社より刊行された，格雷厄姆・格林作品系列（全五册）の一册
2009 年 1 月 14 日	再谈 1949 年后的废名（1949 年以降の廃名について再度語る）	
1 月 14 日	向不随波逐流的出版社致敬（時流を追わない出版者に敬意を表する）	《北京图书订货会》（北京図書発注会，ブックフェア）で目に留めた書物を紹介
3 月　4 日	追忆谷林先生（谷林先生のことを回想する）	止庵が周作人の著作を校訂する際，側面から援助の手を差し伸べてくれた谷林先生への追悼文
3 月 18 日	关于《废名集》（『廃名集』に関して）	《废名集》，废名著，王风编，北京大学出版社 2009 年 1 月
4 月 15 日	浮生只合小团圆	張愛玲の遺作『小団圓』は作者の家族や個人のプライベートにまで関わる自伝的作品である。勝手に同書を出版することは張愛玲の名誉を含む様々な権利を侵すことになる。《小团圆》，张爱玲著，北京十月文艺出版社 2009 年 4 月
7 月 22 日	《鲁迅著译编年全集》答问 问 : 王洪波　答 : 止庵	『魯迅全集』は民国期や台湾で刊行されたもの含めると約十種類の版本がある。ここに『編年全集』という全く新しい版本が出た。なぜこのような新しい版本を編集したのか？編年方式で魯迅を読むと，新たな意味が読み取れるのか等について，編者のひとり止庵に問うた。

8月 5日	关于鲁迅翻译的研究（鲁迅の翻訳に関する研究）	《鲁迅翻译研究》，顾钧著，福建教育出版社 2009年4月
8月19日	鲁迅之为中国左翼文学的中坚 编《鲁迅著译编年全集》之一得	自身も編集に携わった『鲁迅著訳編年全集』について。《鲁迅著译编年全集》（20巻），王世家，止庵編，人民出版社 2009年7月
9月30日	鲁迅的合作作品（鲁迅の合作作品）	
11月 4日	“文情俱胜的随笔”（“文，感情共に勝る随筆”）	《金性尧全集》（1-9巻），上海百家出版社 2009年4-8月
2010年1月13日	止庵：好书满架待细读（良書が書棚いっぱいになって熟読を待っている）	《中华读书报》书评周刊・专家开年荐书 2010年《北京图书订货会》（北京図書発注会，ブックフェア）で目に留めた書物を紹介
2月 3日	“六言诗案”及其他	《谷林书简》谷林著，南京师范大学出版社2009年10月，胡適が1938年，抗日戦争が勃発し，初代駐米大使在任時に書いた六言詩について
3月24日	鲁迅与朱安（鲁迅と妻朱安）	《我也是鲁迅的遗物 朱安传》乔丽华著，上海社会科学院出版社 2009年12月
7月28日	书人书事 也谈毛边书（アンカット本についてまた語る）	
11月24日	张爱玲佚文发现记（張愛玲の散逸した文章の発見記） ■謝其章 止庵	謝其章の質問の手紙に，止庵が返信で答える
12月29日	书影 2010》印象 期待已久的两套书（長らく期待していた二組の本）	《红轮》索尔仁尼琴，江苏文艺出版社2010年6月，《费・陀思妥耶夫斯基全集》河北教育出版社 2010年1月
2011年12月21日	书影2011》印象 读书笔记抄	2011年に印象に残った本

謝其章

2008年7月23日	张爱玲与《万象》“闹掰”之内幕（張愛玲と『万象』仲違いの内幕）	筆者が『語林』という古い雑誌から張愛玲と『万象』の紙面上の論争に関する両者の弁明を発見
7月30日	《时与文》中的唐韬书话	抗日戦争勝利後，1947年3月から1948年9月まで1年半刊行された雑誌《时与文》に執筆した唐韬の書物についての随筆，エッセイについて

9 月 17 日	金性尧与“文载道” 写在金性尧先生逝世一周年之际	国学の泰斗，金性尧のペンネーム“文载道”について
10 月 15 日	鲁迅评论“美人鱼”现象	1930 年代，“美人鱼”と言われ，1936 年ベルリンオリンピックにも出場した女子水泳選手，楊秀瓊を魯迅が《且介亭杂文二集・徐懋庸作＜打杂集＞序》で批評した。
10 月 15 日	誉者或过其实　毁者或损其真（称賛する者は事実を誇大視し，誹謗する者は事実を損なう）	魯迅全集の注釈で消された黄萍蓀について
10 月 29 日	吴兴文和藏书票（呉興文と蔵書票）	呉興文《我的藏书票世界》（広西師範大学出版社）について
12 月 17 日	有书乃城	《坐拥书城》埃斯特尔・埃利斯等（米）上海人民出版社 2008 年 9 月初版の書評
2009 年 2 月 18 日	《周作人传》:“容有空白，却无造作”（『周作人伝』：“空白を受け入れても，作り話はしない。”）	《周作人传》，止庵著，山东画报出版社 2009 年 1 月の書評
5 月 13 日	《小团圆》中的真人真事	《小团圆》，张爱玲著，北京十月文艺出版社 2009 年 4 月の書評
6 月 17 日	忆读　百年来旧书刊收藏史小谈（百年来の古書，古雑誌蒐集史談義）	古本と古雑誌蒐集に関する早期の文献は僅かにあるだけで，その時代には専門の著作はなかった。八冊の《中国近现代出版史料》（1953 年-1957 年，群联出版社）があり役に立つが，これだけでは不十分である。
10 月 21 日	重读张爱玲的新发现（《重读张爱玲》の新たな発見）	《重读张爱玲》，李欧梵等著，陈子善编，上海书店出版社 2008 年 12 月の書評。この本は 2005 年 9 月，張愛玲十回忌（生誕八十五周年）の際，上海で開かれることになっていた《张爱玲与上海：国族，城市，性别与战争》国際学術シンポジウムは開かれていないが，届いた論文が《重读张爱玲》として公に出版された。

2010年3月10日	上水船行难（上り船は前途多難）	《上水船甲集》,《上水船乙集》,谷林著，止庵编，中华书局2010年1月，谷林が亡くなって一年後，止庵の手で敬愛する谷林の遺著『上水船』（甲・乙両集）が出版された。
10月13日	三十年河东	《河东辑》，止庵著，复旦大学出版社2010年8月，友人止庵の三十年集の書評，書名は謝其章の勧めで“三十年河东，三十年河西”から取った。
11月24日	张爱玲佚文发现记（張愛玲の散逸した文章の発見記） ■謝其章　止庵	謝其章の質問の手紙に，止庵が返信で答える
2011年1月19日	一部功劳很大瑕瑜互见的期刊目录（功績は大きいが，欠点もあれば長所もある定期刊行物目録）	《中国现代文学期刊目录新编》吴俊等主编，上海人民出版社2010年
3月16日	回望《青年界》的两个特辑（再読『青年界』の二つの特集）	『青年界』は1930年代の重要な文学雑誌。筆者が古書肆で見つけた同誌の特集号二冊
4月20日	《大方》印象记（『大方』印象記）	《大方》第一期，安尼宝贝主编，北京十月文艺出版社2011年3月。『大方』創刊号の定価は25元だが，内容は値段を超えている。
5月11日	《电影杂志》:中国电影之“断代史”（『電影雑誌』：中国映画の“断ち切られた歴史”）	1947年10月1日に上海で創刊された同雑誌は1949年4月16日に休刊するまで38号続いた。このたび，筆者が提供し，楊小洲によって復刻版が出版された。
7月13日	说说《比竹小品》	《比竹小品》，止庵著，花城出版社 2011年1月の書評
8月3日	《插图本中国文学史》往事	筆者が大ファンである鄭振鐸の『絵入り本中国文学史』の思い出
9月7日	唐韬藏书应该贴标签吗（唐韜の蔵書にラベルを貼るべきか）	唐韜が亡くなった後，氏の蔵書は中国現代文学館に収められたが，筆者はラベルを貼る前に写真を何枚も撮っておくべきだと言う。
11月30日	谁谓情可书，尽言非尺牍	《方继孝说书信的收藏与鉴赏》，方继孝著，工人出版社 2011年6月

楊小洲

2008年1月16日	钟叔河编　周作人作品比较谈	鐘叔河が編集した周作人の作品について
2月27日	止庵编印周作人作品琐谈	止庵が編集刊行した周作人の作品について
4月 2日	《旧墨记》琐谈	《旧墨记》方继孝著，《旧墨二记》同，《旧墨三记》同，北京图书馆出版社
4月16日	故纸堆里觅知堂（古紙の山から周作人を探す）　陈子善编周作人作品琐谈	陳子善が編集した周作人の作品について
6月18日	帕慕克中译本的另一种趣味	トルコの作家，Orhan Pamuk
7月 9日	依然有味是青灯	鐘叔河《青灯集》湖北人民出版社2008. 1. の書評
7月30日	巴尔扎克著作中译本小史	バルザックの中国語訳
7月30日	云集	止庵《云集》南京師範大学出版社2008.1. の書評
9月24日	直言直语　让人不放心的“风雅”（人を不安にする“優雅”）	张昌华《曾经风雅　文化名人的北京》（広西師範大学出版社，2007年9月初版）
11月 5日	瓜蒂盦主的江浙访书记	谢国桢《江浙访书记》三联书店2008年8月二版
12月10日	蠹鱼与聚书（紙魚と書物蒐集）	谢其章《蠹鱼集》（広西師範大学出版社2008年10月初版）の書評
12月24日	回应　传讹与剿说（間違って伝えることと他人の言論を剽窃すること）	《曾经风雅　文化名人的北京》の史実の誤りを批判したことに対して
2009年7月 1日	钟叔河与“走向世界丛书”（鐘叔河と『走向世界叢書』）	鐘叔河が編集して1980年代に刊行された『走向世界叢書』の新版がハードカバーで新たに刊行されることについて
7月22日	读“编年体”《周作人散文全集》的几点感想（編年体『周作人散文全集』を読んだ幾つかの感想）	『魯迅著訳編年全集』と同じく鐘叔河が編集した『周作人散文全集』（広西師範大学出版社）も編年体形式である。
11月11日	闲话中华版小精装（中華書局版小型ハードカバーについての無駄話）	“书人书事系列”，中华书局2009年9月の書評

12 月 30 日	雪后雪中	同時期に出版された自著を紹介。《快雪时晴闲看书》，杨小洲著，中华书局 2009 年 10 月 《夜雨书窗》，杨小洲著，岳麓书社 2009 年 10 月
2010 年 5 月 26 日	大江健三郎的枯燥（大江健三郎のつまらなさ）	
7 月 14 日	艾柯与《丑的历史》	《丑的历史》，翁贝托・艾柯著，彭淮栋译，中央编译出版社 2010 年 3 月
9 月 22 日	《奢华之色》：步摇与凤簪里的优雅	《奢华之色：宋元明金银器研究》，扬之水著，中华书局 2010 年 4 月
11 月 3 日	刀锋评论 《阅读的故事》：他到底写了些什么？（《阅读的故事》：彼はいったい何を書いたのか）	《阅读的故事》，唐诺著，上海人民出版社 2010 年 8 月
11 月 24 日	品读黄永玉（黄永玉を精読する）	《传奇黄永玉》，李辉著，人民日报出版社 2010 年 7 月
2011 年 1 月 12 日	书人书事 闲坐读美人	筆者が自己の読書遍歴を語る。
3 月 30 日	《后天的人》及其他	上海訳文出版社が出した諏訪哲史《后天的人》（あさっての人）ほか外国の作品を紹介。
5 月 11 日	《电影杂志》影印出版前后（『電影雑誌』複製印刷出版前後）	《电影杂志》（上，下），杂志提供人谢其章，特约编辑杨小洲，岳麓书社 2011 年 1 月
8 月 10 日	钟叔河的《小西门集》（鐘叔河の《小西门集》）	《小西门集》，钟叔河著，岳麓书社 2011 年 5 月
9 月 14 日	一套好看的民国儿童读本（一組の美しい民国期の児童読本）	“幼童文库”，海豚出版社 2011 年 9 月
12 月 14 日	谁读懂了《2666》（誰が《2666》を読んで理解したのか）	《2666》，〔智利〕波拉尼奥著，赵德明译，上海人民出版社 2012 年 1 月

3. 止庵《读书，写书与编书》（本を読むこと，本を書くことと本を編集すること）

2008 年 1 月 23 日の『中華読書報』9 面に止庵の《读书，写书与编书》（本を読むこと，本を書くことと本を編集すること）が掲載された。タイトルの前に，編者（咸江南）の言葉が付されている。

数日前に全国ブックフェアで本をめくっていて気がついたのだが，止庵が執筆したり，編

集した本（新刊，重版も含めて）はこの一年間に七，八種類にもなる。止庵が読書について述べた文章は新聞や雑誌に甚だ多く見られる。止庵は広範囲にわたって読むけれども，最も力を入れているところは周作人，廃名，荘子，張愛玲など数名に他ならない。読んでは書き，書いては編集し，かくて『周作人自編文集』，『廃名文集』，『樗下讀荘』など諸本を世に問うている。個人の自由な読書から，個人が深く愛する書物の整理，出版，そしてこの種の本を比較的良いテキストで読者に提供するまでに至っている。遠くの海から入って，花や実を届ける。このようなやり方は中国国内の出版業では少なくない。今，止庵氏にこの一文を特別にお願いし，個人の経験から長年に渡る読書，編集，執筆の行き来について詳しく述べてもらい，その中からフリーの読書家が出版業界に入る経験と道程を理解し，また止庵のような希望を持つ読書家，愛書家に役立ててもらうことを望む。

以上，編者が述べているとおり，この一文は止庵の人となりを知る格好の手がかりとなるだろう。以下はその全訳である。

私が小さい時，父が兄や姉にしっかり勉強するように言うのを聞いて，たまに『三字経』の「蘇老泉，二十七」などの語を引いて，心に留めた。心理的な暗示を受けたかもしれない，二十七歳は私にとって，大切な年である。それからやった多くの事は，そこから理由を見つけることができる。それ以前私は多くのもの，詩や小説を書いたが，興味は次第に減っていった。私もたくさんの本を読んだが，父が手紙で批判したように，「学んでも使いものにならない。」学んでどうしても役立てるというのでは決してないが，私にはちょっとあてがはずれた。

1986年の夏，私は前後して周作人の《知堂文集》，《过去的工作》と《知堂乙酉文编》のリプリント本，この他に《知堂书话》一組を購入した。この時，私がはじめて周氏の作品に触れたのだが，氏の名前はとっくに知っていた。中学校の政治の授業で，魯迅には弟がいてかくかくしかじか，彼は周遐寿というペンネームで作品を発表したと言い，いくつかの字を黒板に書いたことをはっきり覚えている。散文の類は，当代なら楊朔，秦牧，劉白羽，古代なら唐宋八大家のようなものはたくさん読んだが，周作人の文章はそれらと全く違っていた。徐訏の言葉を借りると，「彼のようにまじめに読書と見解を語るのは，中国でこれまで一人の学者もやったことがないし，やる勇気もなかった。」（《从“金性尧的席上”说起》）これは大いに私の興味を引き，それからできるだけ彼の本を捜して読んだ。張愛玲《传奇》のリプリント本と組み版印刷本も，たぶん同じ年に前後して入手した。彼女の作品はそれより前に《收获》誌に改めて発表された《倾城之恋》を読んだにすぎない。張愛玲も同様に私の耳目を一新させた。さらに廃名がいて，その年に私が《桥》のリプリント本を購入し，当然のことながら一番気に入ったのは《人间世》と《世界日报・明珠》に散見する随筆で，私は編集の仕方があまり理想的でない《冯文炳选集》の中からいくつか読んだ。

冬になって，私は先秦の思想家を一通り読もうと誓いを立てた。それ以前は『論語』，『老子』，『公孫龍子』以外，個別の文章を読んだだけだ。読書人のうちに入ると自ら推量したが，実際にはそんなはずはない。それから『詩経』と通読しても，似通った考えだ。私は病気にかこつけて，仕事にいかず，まず『荘子』から始めて，見つけた七八種類の注釈本を広げて，原文とそれに付いている注疏を一字一句照らし合わせて読んだ。最終巻にたどり着いた時は，年を越え，筆記は五万字になった。もし私の人生に最大の影響を与えたものを論ずるならば，その前後に読んだいかなる書物も『荘子』には及ばない。ここで二点だけ述べておく。其の一，『荘子』は「天も得ざれば高からず，地も得ざれば広からず，日月も得ざれば行（めぐ）らず，万物も得ざれば昌（さか）えざるは，これ其れ道か」（天空だってこの道によらなければかくも高く伸びず，大地だってこの道によらなければかくも広く横たわらず，日月もこれがなければかくも正しく運行せず，万物もこれがなければかくもおびただしく栄えない。これこそが道というものだね。〔池田知久訳，『荘子』知北遊第二十二第五章〕）「道」は事物の自然の状態を指し，本来そのようなのだ。人について言えば，固有の価値体系を拒んだ後に得られる自由なのだ。固有の価値体系を拒むと，この体系内で判断しないことにもなる。：不是是，不非非，不是非，也不非是。それから私は《五灯会元》と《古尊宿语录》を読み，さらに一種の考え方を提供してくれた。つまり，その特徴はあらゆる既定の考え方を拒むことである。他人があらかじめ設けた前提を受け入れず，今ある言語環境で話をしない。“逢佛杀佛，逢祖杀祖。”其の二，『荘子』は「庖丁（ほうてい）牛を解く」，「くる者のせみをとる〔達生第十九第三章〕」，「津人（しんじん）舟を操る〔同第四章〕」，「一丈夫の之におよぐ〔同第九章〕」，「梓慶（しけい）木を削りて鐻（きょ）を為（つく）る〔同第十章〕」，「大馬の鉤（こう）を捶（う）つ者」などの話を語っているが道理は皆一つである。「技（わざ）」をそのような程度まで完全なものにすると，それは一つの技に制限されることはなく，技のあらゆる功利目的を超え，同時に技を持つ者自身も超え，通常いわゆる忘我の境地にもなり，それはおそらく「道」に達したのだ。技を持つ側から考えると，彼はある種の行為の中において自分をある種の境界まで昇華させたのである。これは私に一生役に立たせてくれた。

ここで私の読書はだいたい二つの方向，一つは現代文学を標識とし，そしてまた周作人，廃名，張愛玲などに集中した。もう一つは先秦哲学を標識とし，『荘子』，『論語』と『老子』に集中した。私はかつておもしろおかしく言ったことがある。先秦哲学のつまるところ人に関するものであり，『荘子』が語っているのは一人の哲学，「私」でもある。『論語』と『孔子』が語っているのは二人の哲学，「私」以外に，「あなた」或いは「彼」がいる。孔子から見れば，このもう一人は良い人間で，『老子』の作者から見れば，悪いやつだ。先秦の他の思想家の言うところでは，三者の下に引き寄せることができる。例えば孔子の流れには孟子，荀子がおり，老子の流れには孫子，韓非子がいる。ただ荘子だけが独り言を言っている。

続く数年間は，私は別に何も書いていない。機会と縁が足りなかったのかもしれない。例えば魯迅は『域外小説集』に挫折してから，何年も音信が途絶え，銭玄同が《新青年》の代わりに原稿を頼みにくるまでずっとだった。彼は《古小说钩沉》と《小说旧闻抄》を編さんしていたが，北京大学に行って授業をしなければ，《中国小说史略》も書かないだろう。周作人の創作のピークは《新青年》，《晨报副刊》，《语丝》，《骆驼草》そして《大公报・文艺》等との関係と密接である。私はもちろん自分を先人と比べる勇気はないが，その道理もわかる。はっきり言ったら文章は書かなくていい。1990年になって，友人曾一智が『黒龍江日報』の副刊の編集をしていて，私の父に文章を書くように頼んできたが，彼は私に書くように言い，私はようやく筆を執った。初めは書いたのは少なく，毎月一，二編，どれも千字，五年後にまとめて《樗下随笔》（にわうるしの下での随筆）を出版した。私の最初の本である。以降続けて書き，多くは読書筆記で，今まで合計八冊の文集を編集した。私が読んだ本はすべて自分の好みだ。たとえ編集者がテーマを出した作でも，自分がそのテーマに興味があり，かかわる本は読んだものか，或いは読もうと思っているものでなければならない。何日か前に私は友人に言った。ふだん読書をしていて，すこぶる感じるものがあるようなので，書いてみると，決して周到ではないことが分かる。反対から言えば，これはまさに読書の他に何かを書こうとする意義があるからである。他方，周到に書こうと望んでいるので，関連するものを見つけて参考にし，それに伴ってより多くの本を読み，より多くのことを知る。前に文章は書かなくて良いと言ったが，本当に書きたいなら，まじめに向き合わなければならない。例えば『荘子』の庖丁（ほうてい），津人（しんじん）諸氏が行なったように。

私が『荘子』を読んで一冊の本を書き上げたのは，すでに最初の読書から十年経っていた。その間に私は百種余りの注釈書を読み，特に諸説紛々としているところに注意し，だいたいどの細部も前人から啓発を得たが，私自身完本『荘子』と自分で構成した荘子哲学に対して，ますますその中のいかなる見解に完全に同意していない。当時，私はまだ会社に勤めており，帰宅後『荘子』に関する筆記を書き，まるまる一年，三十数万字を書いて，半年の時間整理に費やし，《樗下随笔》（にわうるしの下での随筆）が成った。私ははしがきの中で“不为无益之事，何以遣有涯之生”（無益の事を為さずんば，何を以て有涯の生を遣わさん）を借りて，自分の読書の過程を形容した。項蓮生のこの話，『荘子』「吾（わ）が生や涯（かざ）り有りて，知や涯り无（な）し。涯り有るを以て涯り无きに随うは，殆（あや）うし。已（かく）して知を為す者は，殆うきのみ。」（私の人生には限りがあるが，知るべきことには限りがない。限りある人生を費やして，限りなき知を追いかけるのは，危険なことだ。そうであるにもかかわらず，なお知を追い求めるのは，危険極まりないことだ。〔池田知久訳，養生主第三第一章〕）に対して異義を唱えるのをちらっと見たが，実際言っているのはちょっとした事，一人は命の終わりから振り返っているのに対し，一人は命の始まりから前を見ているのにすぎない。ここまでで止めにするが，私の「限りある人生」でやる「無益な事」は読書のみである。何年か色んな本を読んだ後，この一生で少なくとも詳細に一冊の本を読みた

いと思う。その本は私が時を計算せずに繰り返し味をかみしめるべきもので，その価値と魅力はこの過程の中で失われるものではない，つまり，この「無益な事」を本当に私の「限りある人生」の対応物に成し得るものとして，私が選んだのは『荘子』である。

私が『老子』を読むのは，まだ『荘子』の前に，母は蘇体？で私のためにすべて書き写してくれた。ひとこと付け加えて，母はさらに私のために『詩韻新編』を書き写してくれ，二冊のノートに丸々いっぱい書いてくれた。あの頃『荘子』を読み終わって，引き続いて『老子』を再読したが，私の読書メモはあまり書かなかった。私が先秦の典籍を読むのは，精神的にいくばくかの支持を求めるためにであったが，『老子』はあまり気持ちが良くならない，とりわけ「道」と名付けて，実は「術」であるあのくだりは，朱子が言う「老子は精神的にいちばん有害だ。」けれども，それは私に対してやはり時々に惑わすところがあり，私に機会を見つけてもう一度腕前を磨きたくさせるのだ。それから『老子演義』という本を書く巡り合わせがあって，郭店楚簡，帛書及び王弼以下数十種の注釈本を併せて読んで，『老子』を明らかにしたと思う。私ははしがきの中で，『老子』は中国文化における重要な原典である。好むのも良いし，反対するのも良い。いずれにしても客観的に存在するのである。その中の意味ははっきりしていて，歪曲することはできない。しかも自ずから一つの完全な体を成していて，そのかすを捨てて，その精華を取ろうとしても，恐らくそんなにやさしくないだろう。本の中で言っていることを本当に実行しようとすれば，確かにちょっと恐ろしいが，何人もできるものではない。なぜなら大半が求めている忍耐力がないからである。例えば「これをちぢめんとほっせば，必ずしばらくこれを張れ。これを弱めんとほっせば，必ずしばらくこれを強めよ。これを廃せんとほっせば，必ずしばらくこれを興せ。これを奪わんとほっせば，必ずしばらくこれを与えよ。これを微明という。」（蜂屋邦夫訳注『老子』第36章）すこしも損をしていない人に，このようなやり方はきっと採らないだろう。

私は中国の現代文学に関心はあるが，語っているのは少なく，ただいくつかの本を編集したにすぎない。初めのほうで周作人の作品を読んだことを述べたが，主に鐘叔河がだいたい元のかたちに基づいて出したそれらであり，当時はただ読者になりたいだけで，自分から手を出す気はなかった。どういうわけか十数冊が出ないことになり，世に出ることはなかった。確かにふだんたやすく見つからない。私は手紙を出して尋ねると，編者は返信で新たな構想について言及した。だいたいそれから出た《周作人文类编》のような構想だった。実を言うと私はこのような編集の仕方は必ずしも実行できるとは限らないと思う。なぜならどのジャンルもその背後にはその学問があり，深く理解しえて，はじめてその文章をふさわしい位置に置くことができるのである。作者は文章を書く際，しばしば考えをはっきりさせているので，ある一つのジャンルに入れるのは難しい。さがすのが容易でないことは，それほど重要でない。私はやはり作者自身が最初に編集した文集を再版するのが良いと思う。なぜなら編集時の編目の取捨選択，配列順序には自ずから段取りがあり，再編集してしまうと，この考えが見えなくなってしまうからだ。私が《周作人自编文集》を整理して出版したのは，鐘先

生の元のやり方に戻したのであって，彼が最初半分したことをやり終えたのである。その間に彼が《老虎桥杂诗》谷林の書き写したものと《木片集》1960年代校正刷りを提供してくださり，これは特に感謝をあらわすものである。この二冊はいずれもはじめての出版である。さらに《知堂回想录》があり，元の香港三育図書文具公司の本は間違いが甚だ多く，私は作者の家族が提供してくれた原稿のコピーに基づいて整理し完成させた。時は真夏で，毎朝八時に仕事を始めて，食事以外はずっと夜中まで，丸々一ヶ月費やして，やっと仕事が終った。私が編集した《苦雨斋译丛》に収録しているのは周作人が古代ギリシャ語と日本語から翻訳した作品である。比べてみると，たぶん《自编文集》よりも価値がより大きいだろう。なぜなら大半が保存されてきた作者の原稿に基づいて印刷されているからである。早期に刊行されたものとこれらの原稿を比べてみると，削除書き直しが甚だ多く，中には様子が一変してしまっているものがいくつかある。《译丛》の中の《希腊神话》（ギリシャ神話）は初めての出版でもある。私はさらに周作人の散逸した著書《近代欧洲文学史》を見つけた。原稿は何年もほこりをかぶっていて，私は偶然インターネットである図書館の目録を調べて，周氏の名前の下にこれがあるのを見つけ，かくて作者の家族に調べてもらうよう頼んだが，やはり上梓をしていない。ある人はこのことを聞いて，そのたびに「早くに出た《欧洲文学史》ではないのですか。」と言うが，どうしても当然騙されてしまった。この本は友人戴大洪との共同作業で，すでに出版している。

私は前に言った。周作人に関して，何か言おうとすれば，まず彼が書いた本と訳した本を読んでからするのが良いといつも思っているが，目下一番欠けている事はやはりこれらの著作の整理と出版にある。これは私が彼の一読者としての衷心よりの言葉である。そして，私が十数年来この方面でしたのは，まず自分の必要を満足させるためだった。私は文科系で学んでいないし，大学や研究所で働いていないので，この種のことをするには甚だ困難なのだ。もし誰かが先にやってくれるのなら，私は喜んで座して他人の成果だけを受け取る。私が廃名の本を編集したのもそういうことなのだ。詩人沙蕾はかつて私に教えてくれた。「もし我々が好きな作家の作品を繰り返し繰り返し，十遍も二十遍も読めば，彼の本当に伝えたいことを得るだろう。」今までのところ，私も廃名に対してだけこのようなことをした。私は前に言った。周作人は全体が融合して生まれつきのものだが，廃名は一字一字磨きをかけ，わずかなこともなおざりにしない。前者は理解ができるだけだが，後者は学ぶことができる。周作人の文章は不明瞭なところが多く，作者の本音である。多くは心のままに筆を走らせ，すべてが自然な気持ちの表れである。廃名は文字の運びをスムーズに行過ぎさせたくない気持ちがあり，多くは曲がりくねって飛躍し，それゆえ別の不明瞭さがあり，そこはかとない情感を醸し出している。廃名は流れるような文章の書き方を一番恐れた。私はこのような軽々しく字句を譲歩しようとしない精神にとても心を打たれる。しかし，廃名の文章は古い定期刊行物に散見され，集められておらず，探すのが容易ではない。ある出版社が一揃いの散文全集を刊行し，私はその中に廃名が入ることを待ち望んだが，いかんせん長く待っても

かなわなかった。その結果やむなく自分で一冊，《废名文集》を編集した。廃名には《阿赖耶识论》なる著書があるが，長いこと放って於かれ，それも私の手で初めての出版となった。私は一読者として，（私が再三こう言うのをお許し願いたい）たまに出版に踏み込むのは，この世に出たことがない本を刊行する機会があるからである。光栄だと言うよりも，ちょっと心配だと言うほうが良い。私は数十年前のあの文化大革命を経験した人間であり，多くの先人の心血が一日のうちに壊れるのを目撃しているからである。今は鉛活字で印刷され，どれだけの人がそれを読みたいとは限らないが，結局何かの災難で伝承が途絶えることはないだろう。

私が自分で述べたことを書いたことがある。「ふだん本を買うのが第一，読書は第二，本の編集は第三，執筆は第四。」友人への手紙の中で，かつて「執筆計画」について語ったが，どれも自分の読書経験にもとづく。ある本を一読再読して，或いはある類書をたくさん読んで，考えがなくもなく，どうしても忘れられなければそれを書こうと思う。もちろん書かなくてもかまわない。本はすでに読んだので，裨益するところはすでにあるからである。

4. 止庵，謝其章《收藏的甜酸苦辣》（対談「蔵書の喜びや悲しみ」）

2013 年 5 月 10 日，中国のサイト，新浪網の読書欄（文化读书频道）に，謝其章の《收藏的甜酸苦辣》が登載された。これは《文坛开卷》という番組が基になっており，止庵との対談が活字化され，二人の写真と，Flash Player 10.2 で動画も見られる[1)]。

謝其章の《搜书后记》は著者の 2005 年から 2008 年までの四年間の日記だが，止庵の名はその中にたびたび登場する。例えば 2007 年 12 月 13 日の日記にはこう書かれている[2)]。

十二月十三日　星期四

止庵来，看书，聊天。中午在天外天吃，一张阳光洒满的桌子，我说在此桌看书用不着戴眼镜。二点半分手，他去取《晨报副刊》。…

（止庵がやって来て，本を見て，おしゃべりした。昼は天外天で食べた。一台の陽光がふりそそぐテーブルで，私はこのテーブルで本を読むなら眼鏡は要らないと言った。二時半に分かれた。止庵は『晨報副刊』を取りにいった。…）

これらを読むと，止庵，謝其章は本という共通の趣味を通して，非常に親しい友人関係にあることが分かる。さて，進行役の女性も含めて三人の対談は印刷すると，7 ページの分量にもなる。対談は《读书 写书 藏书》，《我的收藏与写作》，《我不是藏书家》，《我的珍贵收藏》，《收藏的甜酸苦辣》の五つの小見出しに分けられている。ここでは，最後の《收藏的甜酸苦辣》（対談「蔵書の喜びや悲しみ」）を訳することにする。これを読むと，まず，本の命に対する止庵の見解に考えさせられ，次に，本を買ってしまったことで家族に迷惑をかけてしまい，妻の内助の功に感謝

する謝其章の悲しみに読むものは共感するのである。

止庵：本を収集する最後に，どの本が良くて，所蔵する価値が分かるということだろ。

謝其章：そういうことだ。でも君はたくさんの学費を払って，喜びや悲しみを経験して探り出せるのだ。

謝其章（止庵？）：全国人民の収集欲はとても強くて，君や僕が目をつけたら，仮名にしてもだめで，彼らもついて来て奪い取る。だから僕は今買って手に入れるのがとても困難になった。人は謝くん君は大馬鹿だと言う。買った後に書いてはいけない。一度書いて皆が何が良いか分かったら，命知らずなことをして君のものを奪おうとする。だが僕が書くのは目的があってのことだ。僕はコストを回収しなければならない。しかしそれらは回収できない。君の《电影杂志》（『電影雑誌』）やこの漫画を君はどうして回収できようか。何万も投入して，一冊の本がどれだけの原稿料になるのだ。

女：趣味なのでしょう。書かないと不愉快。吐かないと不愉快。

謝其章：その通り。これは僕が自分で選んだのだ。

止庵：文章については，近頃一つの見方がある。僕は普通の人間は一度死に，創造者は二度死ぬと思う。創造物は将来多くの人が淘汰し，ある人の生前の作品は死んでしまい，ある人のは生きている，でも本は死んでしまう，そういうことが多い，さらに彼が死んだ後，本もゆっくりと死んでゆくのだ。我々はきっと後世に伝わると思っているが，我々が読む時間はおそらくとても短く，もし時間を引き延ばしても，おそらく後で次々と消えてゆくだろう。だから，この物は，本当のことを言うと，収集も良い，書くのも良い，一番の楽しみはまさにこの時なのである。もし，君が創作の中に楽しみを得られないのなら，早めにこのことを止めよ。

女：収集も同じね。

止庵：同じだ。収集は押さえが利かない。僕はある人が「自分で処分する」のに大賛成だ。これは古い決まりだ。人がある年齢になったら，日数は多くない，物は，良いと思ったら持って行ったら良い。

謝其章：これ二つで三百（元），それでいいなら僕は欲しいし，だめならよそう。

男（店主？）：三百八十（元）。

謝其章：この数冊，毛沢東，周恩来，蒋介石，あんたは僕にいくら欲しいんだい，十時すぎだよ。そばの人が言う，やれやれ，彼は買えるのに。聞一多の次の世代，彼が探りを入れたので，僕はその場を離れた。それから僕は戻ってきて彼に言った。蒋介石は要らない，僕は毛沢東と周恩来だけ欲しい，彼はそれではだめだというので，僕はまた向きを変えていったが，また戻ってきて買って行った。それから僕はいくら足したか，人は皆僕に売るのを止めた。

謝其章：酸甜苦辣。（すっぱい，甘い，苦い，辛い。喜びと悲しみさ。）

止庵：酸（すっぱい）は何を指すんだい。

謝其章：‘酸’というのは，他人が買うのを見て自分は買っていない，‘酸’，嫉妬だね。それから悲しみもある。帰宅したら子どもが学費を渡さなければならないのに，お金がない。お金は皆本を買った。妻はたずねるがそれでも言う勇気がない。大金をはたいて本を買ったら，家に帰って生活費を下げなければならない，それが‘心酸’（悲しくなる）だ。‘酸’はもう話すのはよそう。‘甜’（甘い。喜び）は良い本を買えたこと，でもこれは‘酸甜苦辣’の中で一番少ない。品物が良い，値段も安い，さらに好みだ，こんな良いことは簡単に出会えるものではない。‘苦’は二つの苦しみがある。一つは体力の面で，早く来て，寒さに耐え日照りをこらえ，今日のような良い天気はない。‘辣’は値段がとても悪辣だ。香港語で言うと，‘有一辣手’。

謝其章：物（書籍）を買って，百万（元）余りになっただろう。僕の妻はここで僕に言って欲しくないだろうけど，わが家の様子を見て，どこに彼女の居場所があるのだ。これはとても悲しいのだ。もし君の妻が毎日こんなに服を買ったら君は耐えられるだろうか，収集家の後ろには賢い妻の内助の功があり，くどくど言うけど，君を容認しているのだと彼らは法螺を吹くけど。僕らの主は知っている。私はあなたが毎日本を買っているのを知らないとあなたは思うの。僕は人にまた本を出すよと法螺しか吹けない。妻はいくら儲かるの，九千元ですって。一冊の本の儲けで，トイレを直すのにも足りないわ。

女：本当に容易じゃない。

謝其章：本を収集している人間は，本当のことを言うと，短所がたくさんある。手に入れる前は手に入れられないのではないかと心配し，手に入れたら失うのではないかと心配する。同時にお金に心を痛めている。例えば肩が触れて，他人が買って行ってしまうと，何日も気分が良くない，それが終るときを知らないから，本当に特に辛い。止庵は今ちょっとその悪癖にかかっている。君こそが個人的な得失を過度に気にしているのだよ。

5. 楊小洲　《电影杂志》影印出版前后（『電影雑誌』複製印刷出版前後）

2011 年 1 月，中国岳麓書社から中華民国の時代に出た『電影雑誌』の複製印刷が出版された。箱入り上下二巻の豪華本である。これは謝其章が長年苦労して集めた同雑誌を複製印刷したものである。この間の経緯について，複製印刷の編集に携わった楊小洲が，『中華読書報』2011 年 5 月 11 日 11 面で《电影杂志》影印出版前后（『電影雑誌』複製印刷出版前後）と題して，書いている。これを読むと，楊小洲が謝其章と酒を飲んで歓談している時に複製出版の考えが生まれたこと，謝其章が所蔵している雑誌を複製する時，強い光が当たり古い雑誌の紙にダメージを与えないかと心配していたが，デジタルカメラを使用することによって解決したこと，そして何よりも二人の信頼関係が分かる。

同文は四段落で書かれているが，この雑誌の複製出版が成るまでの前半の三段落をここで訳す

ることにする。

今年（2011 年）の北京图书订货会（北京図書発注会）で，岳麓書社が急いで製作した二組の民国期『電影雑誌』が展覧に参加した。展覧当日に一組盗まれるとは思いもよらなかったが，失われた時が紙面に残っているのを見て，それも一つの思い出である。映画は観覧することができるだけでなく，手にとって読むこともできる。往時を懐かしむ読者はこれらの画像によって自分の好みを託し，黄ばんだ写真から自分が経験したことがない歳月を感じるのだ。しかし，映画に関する雑誌は多く，《电声》，《明星》，《青青电影》，《时代电影》など数十種，すべて複製印刷するのはかなりの仕事になる。実は民国期の古い雑誌を複製する考えは何年も前からあって，八年前に私が《古今》雑誌を一揃い買ってから，ずっとその雑誌を複製出版しようと考えていた。とどのつまり，この雑誌に載っている文章は非常に良く，歴史や昔を語る静かでやすらかな小品は明清の筆記のようで，読んで渇きが癒やされ，そのことがこの雑誌を「最も良い文史刊行物」と称賛されるようにしている。北京の古雑誌収集家，謝其章先生とよく一緒に酒を飲んでおしゃべりするが，話題はいつも，民国期の雑誌をめぐって，その頃，あるいくつかの民国期のなかなかお目にかかれない古雑誌を複製しようという考えがうまれた。ちょうど良い時，一昨年岳麓書社曾徳明先生にそのような話を喋ったら，彼は即座に認めて，プランを立て，私が北京に戻って，謝其章先生との相談を待つだけになった。

謝氏は古雑誌を収集し，古雑誌の研究もしている。《漫话老杂志》，《旧书收藏》，《老期刊收藏》，《创刊号风景》，《创刊号剪影》，《封面秀》，《梦影集　我的电影记忆》，《“终刊号”丛话》等を執筆出版し，この領域ではすこぶる多くの研究成果を出して，古雑誌の学者としてそのジャンルを代表する人物である。その略歴を見ると，「上海で生まれ，久しく北京に居を構える」彼は上海人の頭のよさと北京人の冗談好きを併せ持ち，彼と一緒におしゃべりして彼の北京言葉を聞くことは，もう一つの楽しみである。しかし，彼は決して人と付き合いたがらない。とりわけ，始めて知り合った者に対して多くは冷淡である。しばしば人を拒絶し彼に近づくのは大変難しい。何年も付き合って彼と何らわだかまりがなくなっても，彼に自身が何年も苦労して集めた希少な古雑誌を出してもらうことは，生易しいことではない。まして彼の「古雑誌は門外不出」の言葉は各地に届き，美しい顔が彼を思っても人は接近しない，そばにいる者はその趣味を知って尻込みしてしまい，あまたのこの事情を知らない記者が興に乗って取材に訪れると，皆断られ外に追い出され，「虎のしっぽ」と呼ばれる書斎の見学を許してもらえない。私が彼のコレクションを複製出版したいと言った時も，その答えは当然楽観的でない「僕にちょっと考えさせてくれ。」だった。

この言葉はもともと理由をつけて断る言葉で，結局自分のコレクションを捧げて皆に味わってもらうことは，コレクターの立場から言えば，決して望んでいる気持ちではない。でも大よその事は皆可能だ，説得の道程はとても困難だけれど，結果はとても明るい。謝先生

はただ古雑誌を複製すると損なってしまうのではないかと思い，スキャニングを使うのには同意せず，強い光線が古い雑誌の紙質に損害をもたらし，破れやすくなってしまうことを心配されたが，これは技術的な難しさであり，僕にちょっと考えるように求めたのだった。私は静物撮影には詳しいほうで，当然デジタルカメラを使用してひっくり返して映そうと思っていたけれど，スキャニングはメガバイト，デジタルカメラは画素，両者の間のデータをどのように転換して印刷できるか。なぜならデジタルカメラの画素は，画像を印刷する解像度に直接影響してくる。以前のやり方では，まず撮影をして写真を現像し，それから写真を電子製版する。現在のデジタル時代にはこんな面倒なことは必要ない，デジタルの画素さえ得られればよい。重要なのは適合するカメラを購入することだ。計算ではキャノンの5 Dmake 2というオールサイズのカメラが要求にかなう。写真複製を使うことはスキャニングより手間が省ける。スキャニング印刷写真を印刷に再び用いれば，その過程で‘撞网现象’（意味不明？何がしかのトラブル）が起こるだろう。版を直さず印刷した写真はいっぱい粒が現れ，読めなくなる。手を入れるのに大量の時間と労力がかかり，撮影して直接画像にすれば，このような恐れはない。謝先生の「古雑誌は門外不出」に戻ろう。先生には手を焼いたが，謝先生には惜しまない気持ちがあり，ついに私に古雑誌を持って行かせることを承知した。撮影には灯りなどの環境に補助が必要で，大方が知人で安心だが，私自身のほうが同意を得てすこぶる機嫌が良くなり，車を走らせて，謝宅に三十八期一揃いの『電影雑誌』など三種類を取りに行って，家に戻ってから，急にその日の私のカーナンバーは通行制限だったことを思い出し，その結果は「あなたは分かってますよね。」言うのも面白いことになった。

注

1）http://book.sina.com.cn/news/a/2013-05-10/1445465996.shtml
2）謝其章《搜书后记》中国，岳麓書社 2009 年 11 月，p214